

# 日本語版 Heartland Forgiveness Scale の開発

長内 綾・古川 真人

## Development of a Japanese Version of the Heartland Forgiveness Scale

Aya OSANAI and Masato FURUKAWA

The purpose of this study was to develop a Japanese version of the forgiveness scale in order to measure dispositional forgiveness rather than non-dispositional forgiveness. We translated the Heartland Forgiveness Scale, which contains subscales to assess forgiveness of self, others, and situations. Exploratory factor analysis revealed that the Forgiveness Scale consisted of two subscales (i.e., Self and Situations, and Others). Results indicated that the Forgiveness Scale had adequate internal consistency. Moreover, both subscales of the Forgiveness Scale were significantly correlated in the expected direction with several measures of forgiveness.

*Key words* : forgiveness (寛容性), mental health (メンタルヘルス), reliability (信頼性), validity (妥当性)

### 問題と目的

寛容性 (forgiveness) に関する実証的な研究は、近年、諸外国を中心にめざましい発展を遂げている。それに伴い、寛容性を測定する尺度も数多く開発されてきている。しかし、寛容性の定義は研究者間によってさまざまであり、未だ一貫した見解は得られていない。

たとえば Thompson & Snyder (2003) は、寛容性を「自分を傷つけた相手やできごと、状況に対する認識の再構築—つまり、それらに対する考え、感情または行動をネガティブなものからニュートラル、もしくはポジティブなものへと変化させた結果」と定義している。Worthington (1998) によれば、寛容性は「自分を傷つけた相手を避けたり相手と距離をおこうとする気持ち、また、怒りや相手に仕返ししたいという欲求を減らすための動機づけである」と定義される。また、寛容性を「自分を不当に傷つけた相手に対する考え、感情、または行動の向社会的変化」(McCullough & Witviliet, 2002) や「自分を不当に傷つけた相手に対する、怒り、否定的な考え、冷淡な態度などの権利を進んで放棄すること—さらには相手

が受けるに値しない、思いやり、やさしさ、そして愛さえをもその相手に対して感じること」(Enright & Coyle, 1998; Enright, Freedman, & Rique, 1998) などと定義する立場もある。さらに、寛容性をコーピング (coping) の一部と考える研究者もおり (Rasmussen & Lopez, 2000)、寛容性に関する定義は実にさまざまである。

しかし一方、寛容性を何と区別すべきか、という点については、研究者の間である程度の一致した意見が得られている (McCullough, Pargament, & Thoresen, 2000)。たとえば Rye, et al. (2001) によれば、多くの研究者は寛容を容赦すること (legal pardon)、大目にみること (condoning)、忘れ去ること (forgetting) と区別して考えるべきだとの見方をしており、さらに North (1987) はこれに加え、寛容性を弁解すること (excusing) や否定すること (denying) などの類似行動とも区別している。また、寛容性は和解 (reconciliation) と混同されがちだが、両者には明確な違いがあると指摘する研究者も多い (e.g., Freedman, 1998; Freedman, Enright, & Knutson, 2005; Waal & Pokony, 2005)。

ところで、寛容性はさまざまな psychological

well-being と関連があると言われており, McCullough (2000) によれば, そのことが近年多くの研究者を寛容性研究へと惹きつけて止まない, 一つの推進力となっている。たとえば, 寛容性は愛, 思いやり, 信頼, 共感性, 同情などを助長させる (McCullough, Worthington, & Rachal, 1997; Worthington & Wade, 1999) との報告や, また, いくつかの研究では, Big Five の調和性と寛容性との正の相関関係が確認されている (Emmons, 2000; McCullough, et al., 1998; Worthington & Wade, 1999)。一方, Hope (1987) は自身のセラピストとしての経験から, 寛容性の高いクライアントはそうでないクライアントよりも怒りや不安, 抑うつ傾向の低いことを明らかにしており, さらに寛容性の高い者はそうでない者よりも Big Five の神経症傾向が低いこと (McCullough, 2000) も報告されている。

これらの先行研究が示すとおり, 個人の寛容性を測定することは人々の精神的健康をサポートする上で極めて重要な見地であると推測される。しかし, その研究の多くは欧米を中心に行われており, 国内における寛容性研究はいまだ活発化されていない。そこで本研究では, 寛容性尺度の日本語版を作成し, その信頼性と妥当性を検証することを目標とする。

#### 寛容性を測定する尺度

従来の寛容性研究に目を向けてみると, その尺度は大きく分けて二つに分類される。一つは自分を不当に傷つけた特定の相手やできごとに対してなど, 特定の相手や場面に対する寛容性 (nondispositional forgiveness) を測定するための尺度である (e.g., McCullough, et al., 1998; Hargrave & Sells, 1997)。これらの寛容性は特定の相手や場面に対するものであるため, 相手や場面の変化に応じてそれらに対する寛容性も変化する可能性がある。そしてもう一つはある程度普遍的で変化しにくい, 個人の傾向としての寛容性 (dispositional forgiveness) を測定するための尺度である (e.g., Berry et al., 2001; Hebl & Enright, 1993; Mauger, et al., 1992; Mullet, Houdbine, Laumonier, & Girard, 1998; Tangney, Fee, Reinsmith, Boone, & Lee, 1999)。McCullough & Witvilliet (2002) は, ある特定の相手や場面に対する寛容性がメンタルヘルスや well-being と無

相関であるのに対して, 個人の傾向としての寛容性は人々のメンタルヘルスや well-being と重要な関連があると指摘している。また, Thompson, et al. (2005) も, 個人の傾向としての寛容性は, 特定の相手や場面に対する寛容性よりも, 人々のメンタルヘルスや well-being との関連が深いことを報告している。以上のことから, 本研究では, 特定の相手や場面に対する寛容性よりも, 個人の傾向としての寛容性を測定するための尺度に注目し, その日本語版作成を目指すこととする。

ところで, 従来の傾向としての寛容性を測定するための尺度は, その多くが他者に対する寛容性を測定するためのものである。自己に対する寛容性を測るための尺度は, Mauger, et al. (2002) による the Forgiveness of Self and Forgiveness of Others Scales と Tangney, et al. (1999) の the Multidimensional Forgiveness Inventory のわずか2つである。しかし, Mauger, et al. (1999) はこの尺度を使い, 他者に対する寛容性と比べ, 自己に対する寛容性の方が, 抑うつ, 不安, 怒りなどのメンタルヘルスとより強い関連を示すことを報告しており, 他者に対する寛容性のみならず, 多様な局面の寛容性の測定が重要視されている。

このような流れの中, Thompson, et al. (2005) は自己, 他者, そして誰もコントロールすることのできない状況に対する寛容性を測定する新しい尺度, the Heartland Forgiveness Scale (HFS) を開発している。彼らがこの尺度を開発する以前には, 状況に対する寛容性を測定し得る尺度はなく, まったく新しい概念であった。しかしながら, 彼らは HFS とさまざまな psychological well-being との関連をみた研究において, 状況に対する寛容性が自己, 他者に対するそれと異なる, 独特の相関関係を示すことを明らかにしている。彼らによれば, 状況に対する寛容性は, 抑うつ, 不安, 生活満足感, 怒りのいずれとも強い関連を示し (自己に対する寛容性では怒りが無相関であり, 他者に対する寛容性では怒りのみ相関関係が確認された), 自己や他者に対する寛容性よりも正確に, 個人の psychological well-being 傾向を予測することが可能であると主張している。

そこで, 本研究では Thompson, et al. (2005) の HFS を邦訳し, その信頼性と妥当性を検証していくことにする。

## 方 法

### 目 的

日本語版寛容性尺度を作成し、探索的因子分析によりその因子的妥当性を、再検査法によって信頼性を検証することである。

なお、本研究における寛容性は、前述した Thompson & Snyder (2003) の定義に準ずることとする。

### 手続きと調査対象

調査は2005年11月上旬から12月上旬、東京都内の私立女子大学に通う学部生を対象に、質問紙法を用いて実施した。回答に記入漏れ等がみられた者を除く、有効回答者数114名（平均年齢19.96歳、範囲18～22歳、 $SD=1.10$ ）を最終的な分析対象とした。再検査法による信頼性を検証するため、そのうち61名に対して、4週間後、再度同一の調査を実施した。有効回答者数は59名（平均年齢20.49歳、範囲19～22歳、 $SD=.68$ ）であった。

### 調査内容

質問紙は以下の4つの部分から構成された。社会的望ましき尺度を除くすべての尺度の日本語訳に際しては、以下の手続きを経た。まず第一著者によって原版の尺度の直訳および意識がなされ、原案が作成された。その後、第二著者および心理学系研究助手1名を加え、意味のとりにくい表現がないか、原版の意味から逸脱していないか等の検討がなされた。その後、第一著者が原案を修正し、アメリカまたはカナダの大学在籍の英語に精通した心理学部教員2名に依頼して、バック・トランスレーションを行った。その後、意味の取り違いや文化差がみられた項目について訳を改め、前回とは違う翻訳者によって原文と日本語訳との意味の相違がないことを確認し、数回の検討を繰り返した上で日本語訳を決定し、最終的な日本語版尺度とした。

#### 1) 日本語版寛容性尺度

Thompson, et al. (2005) による the Heartland Forgiveness Scale を日本語訳して使用した (a Japanese Version of the Heartland Forgiveness Scale; 以下, J-HFS とする)。この尺度は個人の傾向としての寛容性を測定するためのもので、「Self (自分)」「Others (他者)」「Situations (状

況)」の3側面に対する寛容性を測定する。各6項目、計18項目から成る。また、6項目のうち半分は逆転項目となっている。回答は原版と同様に「7 非常にあてはまる」～「1 全くあてはまらない」までの7件法で求めた。

#### 2) 非傾向的な寛容性を測定する尺度

J-HFS の構成概念的妥当性を検証するため、McCullough et al. (1998) による the Transgression-Related Interpersonal Motivations Inventory (以下, TRIM とする) 12項目を日本語訳して使用した (以下, TRIM 日本語版とする)。この尺度は最近自分を傷つけた相手を想起させ、その相手に対する寛容性を測定する、非傾向的な寛容性を測定するための尺度である。尺度は5つの「Revenge (リベンジ)」項目と7つの「Avoidance (回避)」項目に分かれている。回答は「5 非常にあてはまる」～「1 全くあてはまらない」までの5件法で求めた。この尺度では得点が高いほど非傾向的な寛容性が高いこととなるため、リベンジ因子、回避因子ともに J-HFS との負の相関関係が期待される。なお、同尺度は Thompson, et al. (2005) の研究でも非傾向的な寛容性を測定するための尺度として用いられており、HFS との負の相関関係が確認されている。

#### 3) 傾向としての寛容性を測定する尺度

J-HFS の構成概念妥当性を検証するため、Mauger, et al. (1992) による Forgiveness of Others and Forgiveness of Self Scales (以下, FOFS とする) を日本語訳して使用した (以下, FOFS 日本語版とする)。同尺度は他者に対する寛容性を測る Forgiveness of Others (以下, FO とする) 15項目と、自分に関する寛容性を測る 15項目 Forgiveness of Self (以下, FS とする) の計30項目から成る。原版と同様の2件法 (はい、いいえ) で回答を求めた。同尺度は Thompson, et al. (2005) の研究でも個人の傾向性としての寛容性を測定するための尺度として用いられており、HFS との正の相関関係が確認されている。

#### 4) 社会的望ましき尺度

寛容性を測定する際の社会的望ましきの影響は、Hoyt & McCullough (2005) らによって指摘されている。そこでそのようなバイアスを排除するため、本調査では北村・鈴木 (1986) による日本語版 Social Desirability Scale 短縮版 (以下, SDS とする) 10項目を用いた。回答は2件法 (は

い、いいえ) で求めた。彼らによれば、SDS 10項目合計の平均得点よりも2標準偏差分を超える得点を示す者は social desirability 高度の者と考えられる。今回の分析では、この SDS 10項目の平均値3.78 (SD=1.54) を基準とし、その得点プラス2標準偏差分を上回る6名を分析から除外した。

## 結 果

### J-HFSの分析

まず、J-HFS18項目に対して逆転項目処理を行った後、各項目の平均値、標準偏差を算出した。次に全18項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化 (4.64, 2.04, 1.68, 1.36, 1.20, …) と因子の解釈可能性を考慮すると、期待された3因子構造とは異なる、2因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度2因子を仮定して主因子法・Varimax 回転による分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった4項目を分析から除外し、残りの14項目に対して再度主因子法・Varimax 回転による因子分析を行った。

Varimax 回転後の最終的な因子パターンを Table 1 に示す。

第1因子は9項目で構成されており、自分自身の失敗や困難な状況に対する寛容性などを問う項目が高い負荷量を示していた。そこで第1因子を「自己・状況に対する寛容」因子 (以下、自己・状況) と命名した。

第2因子は5項目で構成されており、他者に対する寛容性を表す項目が高い負荷量を示していた。そこで第2因子を「他者に対する寛容」因子 (以下、他者) と命名した。

各因子に付加量の高い項目得点を合計し、「自己・状況」得点 ( $M=38.98$ ,  $SD=7.43$ ), 「他者」得点 ( $M=19.83$ ,  $SD=4.63$ ) とした。さらに、全14項目の得点を合計し、J-HFS 総得点 ( $M=58.82$ ,  $SD=9.84$ ) とした。

### 信頼性の検証

J-HFS の内的整合性を確認するため、クロンバックの  $\alpha$  係数を算出したところ、自己・状況では  $\alpha = .83$ , 他者では  $\alpha = .73$ , J-HFS 全体では  $\alpha = .82$  といずれも十分な値を示した。

Table 1 日本語版寛容性尺度の因子分析結果 (主因子解・Varimax 回転後の因子パターン)

		F1	F2	共通性	M	SD
<b>&lt;自己・状況に対する寛容&gt;</b>						
状況	ものごとがどうしようもない理由でうまくいかないとき、それについてよくよく考える*	.739	.100	.557	3.43	1.55
自己	自分が失敗して落ち込んでも、時間が経てばゆとりを持てるようになる	.730	.210	.577	5.06	1.18
状況	困難な状況でもいずれば落ち着くことができる	.654	.184	.462	4.95	1.18
状況	自分にはどうしようもできない状況で落ち込んだとき、それについて否定的に考え続ける*	.555	.133	.326	3.67	1.55
状況	誰のせいでもないネガティブな状況を受け入れるのはとても難しい*	.538	.090	.297	3.87	1.41
状況	時間をかければ、人生の困難な状況も受け入れることができるようになる	.534	.008	.286	4.93	1.11
自己	自分の失敗から何かを学ぶことで、それを乗り越える	.528	.151	.302	4.74	1.05
自己	時間が経つにつれて、自分の犯した失敗を理解できるようになる	.519	.105	.281	4.74	0.98
自己	間違いを犯した自分をいつまでも責め続ける*	.445	-.019	.198	3.71	1.36
<b>&lt;他者に対する寛容&gt;</b>						
他者	人に不当な扱いを受けたら、その人を悪く思い続ける*	.142	.696	.504	3.65	1.32
他者	自分を傷つけた人をいつまでも責め続ける*	.162	.664	.468	4.16	1.28
他者	かつて自分を傷つけた人でも、時間が経てばいい人だと思える	.254	.610	.436	4.09	1.43
他者	人に裏切られても、時間が経てばそれは過去のことだと思える	.013	.572	.328	3.93	1.35
他者	間違っていると思うことをした人を許すことができない*	.013	.402	.162	4.01	1.26
	因子寄与	3.25	1.93			
	寄与率(%)	23.20	13.82	37.02		

\*逆転項目

注) 項目左は Thompson et al. (2005) による HFS での下位尺度分類を表す

さらに J-HFS の再検査信頼性を検討するため、第1回目の調査より4週間後の J-HFS の各得点をピアソンの相関係数により検証したところ、自己・状況が  $r = .23$  ( $p < .10$ )、他者が  $r = .33$  ( $p < .05$ ) となった。

#### 妥当性の検証

J-HFS の構成概念妥当性を検証するため、Thompson, et al. (2005) にならい、TRIM 日本語版、FOFS 日本語版との関連をピアソンの相関係数を用いて検証した (Table 2)。なお、TRIM 日本語版および FOFS 日本語版は因子分析の結果、それぞれが確認されている因子構造をとっており、内的整合性も十分な値を示した。Thompson, et al. (2005) の研究では、TRIM との相関関係は HFS の Others 因子と HFS 全体で見られ、HFS の Self 因子、Situation 因子と TRIM との相関関係は確認されていない。一方、FOFS との関連では、HFS の Self 因子は Others 因子よりも FS との相関が強く、同様に HFS の Others 因子は Self 因子よりも FO との相関が強いことが報告されている。

本調査における J-HFS と TRIM 日本語版との関連では、「自己・状況」「他者」「J-HFS 全体」すべてにおいて、リベンジ、回避、TRIM 日本語版全体との間に負の有意な相関関係がみられた。一方、FOFS 日本語版との関連では、J-HFS の自己・状況は FS と、他者は FO と、J-HFS 全体は FS、FO、FOFS 日本語版全体との間に正の有意な相関がみられた。

以上のように本研究では、Thompson, et al. (2005) の結果と J-HFS はおおむね同様の結果が示されているが、唯一、自己・状況とリベンジ、

回避、TRIM 全体との間に負の相関関係が確認されたことのみが、彼らの研究と異なる様相を呈した結果となった。

#### 考 察

本研究の目的は、日本語版寛容性尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検証することであった。数多い既存の寛容性を測定する尺度のうち、本研究では、①Psychological well-being との関連が強い、傾向としての寛容性を測定することが可能、②状況に対する寛容性を測定できる唯一の尺度である、という2つの観点から、Thompson, et al. (2005) による the Heartland Forgiveness Scale に注目し、その日本語版を作成し、信頼性と妥当性を検証することを試みた。探索的因子分析の結果から、日本語版寛容性尺度は Thompson, et al. (2005) によって確認されている3因子構造とは異なる、2因子構造をとることが明らかになった。しかし、内的整合性、再検査法の結果からその信頼性が、TRIM 日本語版、FOFS 日本語版との相関関係からその構成概念妥当性が確認されたことから、日本語版寛容性尺度は本調査で得られた2因子構造を有する尺度としてある程度確立されたといえよう。

Thompson, et al. (2005) の研究で確認された状況に対する寛容性は本研究においては下位尺度として確立されなかったが、第1因子に高い負荷量を示した項目に目を通してみると、彼らの研究で Situation 因子として確認されていた項目が含まれていることが分かる (e.g., 「ものごとがどうしようもない理由でうまくいかないとき、それについてくよくよ考える」, 「困難な状況でもいず

Table 2 日本語版寛容性尺度と各尺度との相関および平均・SD ( $N = 114$ )

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	M	SD
1 自己・状況	1.00									38.98	7.43
2 他者	.29**	1.00								19.83	4.63
3 J-HFS	.89***	.69***	1.00							58.82	9.84
4 リベンジ	-.24*	-.47***	-.39***	1.00						13.02	4.75
5 回避	-.20*	-.43***	-.35***	.35***	1.00					24.47	5.99
6 TRIM 日本語版	-.25**	-.51***	-.42***	-.90***	.84***	1.00				37.48	9.39
7 FS	.45***	-.03	.33**	-.07	-.11	-.10	1.00			6.46	2.85
8 FO	-.18	.58***	.40***	-.43***	-.70***	-.64***	.11	1.00		8.29	3.34
9 FOFS 日本語版	.40***	.39***	.49***	-.34***	-.57***	-.50***	.70***	.79***	1.00	14.84	4.61

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

れは落ち着くことができる」)。このことから、状況に対する寛容性は因子として確立されるまでは至らなくとも、個人の傾向としての寛容性を構成する要因として確かに存在することが明らかとなり、また、今後の寛容性研究の発展に向けて状況に対する寛容性を測定することが1つの分岐点となる可能性が示唆された。

### 引用文献

- Emmons, R. A. 2000 Personality and Forgiveness. In M.E. McCullough, K. I. Pargment, & C. E. Thoresen (Eds.), *Forgiveness: Theory, Research, and Practice*. New York: The Guilford Press, pp.156-175.
- Enright, R. D., & Coyle, C. T. 1998 Researching the Process Model of Forgiveness within Psychological Interventions. In E. L. Worthington Jr. (Ed.), *Dimensions of Forgiveness*. Radnor, PA: Templeton Foundation Press, pp.139-161.
- Enright, R. D., Freedman, S., & Rique, J. 1998 The Psychology of Interpersonal Forgiveness. In R.D. Enright & J. North (Eds.), *Exploring Forgiveness*. Madison: University of Wisconsin Press, pp.46-62.
- Freedman, S. 1998 Forgiveness and Reconciliation : The Importance of Understanding How They Differ. *Counseling and Values*, 42, 200-126.
- Freedman, S., Enright, R. D., & Knutson, J. 2005 A Progress Report on the Process Model of Forgiveness. In E.L.Worthington Jr. (Ed.), *Handbook of Forgiveness*, New York: Routledge, pp.393-406.
- Hargrave, T. D., & Sells, J. N. 1997 The Development of a Forgiveness Scale. *Journal of Marital and Family Therapy*, 23, 41-63.
- Hebl, J. H., & Enright, R. D. 1993 Forgiveness as a Psychotherapeutic Goal with Elderly Females. *Psychotherapy*, 30, 658-667.
- Hope, D. 1987 The Healing Paradox of Forgiveness. *Psychotherapy*, 24, 240-244.
- Hoyt, W. T., & McCullough, M. E. 2005 Issues in the Multimodal Measurement of Forgiveness. In E. L. Worthington Jr. (Ed.), *Handbook of Forgiveness*. New York: Routledge, pp.109-123.
- 北村 俊則・鈴木 忠治 1986 日本語版 Social Desirability Scale について *社会精神医学*, 9, 173-180.
- Mauger, P. A., Perry, J. E., Freeman, T., Grove, D. C., McBride, A. G., & McKinney, K. E. 1992 The Measurement of Forgiveness: Preliminary Research. *Journal of Psychology and Christianity*, 11, 170-180.
- McCullough, M. E. 2000 Forgiveness as Human Strength: Theory, Measurement, and Links to Well-being. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 19, 43-55.
- McCullough, M. E., Pargament, K. I., & Thoresen, C. E. 2000 The Psychology of Forgiveness. In M.E. McCullough, K. I. Pargment, & C. E. Thoresen (Eds.), *Forgiveness: Theory, Research, and Practice*. New York: The Guilford Press, pp.1-14.
- McCullough, M. E., Rachel, K. C., Sandage, S. J., Worthington, Jr., E. L., Brown, S. W., & Hight, T. L. 1998 Interpersonal Forgiving in Close Relationships: II . Theoretical Elaboration and Measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 1586-1603.
- McCullough, M. E., & Witvliet, C. V. 2002 The Psychology of Forgiveness. In C. R. Snyder, & S. J. Lopez (Eds.), *Handbook of Positive Psychology*. Oxford: Oxford University Press, pp.446-458.
- Mullet, E., Houdbine, A., Laumonier, S., & Girard, M. 1998 "Forgiveness": Factor Structure in a Sample of Young, Middle-Aged, and Elderly Adults. *European Psychologist*, 3, 289-297.
- Rasmussen, H. N., & Lopez, S. J. 2000 *Forgiveness and adaptive coping*. Poster session presented at the annual meeting of the American Psychological Association, Washington, DC.
- Rye, M. S., Loiacono, D. M., Folck, C. D., Olzowski, B. T., Heim, T. A., & Madia B. P.

- 2001 Evaluation of the Psychometric Properties of Two Forgiveness Scale. *Current Psychology*, 20, 260-277.
- Tangney, J., Fee, R., Reinsmith, C., Boone, A. L., & Lee, N. 1999 *Assessing Individual Differences in the Propensity to Forgive*. Paper presented at the annual meeting of the American Psychologist Association, Boston.
- Thompson, L. Y., Snyder, C. R. 2003 Measuring Forgiveness. In S. J. Lopez, & C. R. Snyder (Eds.), *Positive Psychological Assessment: A Handbook of Models and Measures*. American Psychologist Association. pp.301-312.
- Thompson, L. Y., Snyder, C. R., Hoffman, L., Michael, S. T., Rasmussen, H. N., Billings, L. S., Neufeld, J. E., Shorey, H. S., Roberts, J. C., & Roberts, D. E. 2005 Dispositional Forgiveness of Self, Others, and Situations. *Journal of Personality*, 73, 313-359.
- Waal, F. B. M., & Pokorny, J. J. 2005 Primate Conflict and Its Relation to Human Forgiveness. In E. L. Worthington Jr. (Ed.), *Handbook of Forgiveness*. New York: Routledge, pp.17-32.
- Worthington, E. L., Jr. 1998 Empirical Research In Forgiveness: Looking Backward, Looking Forward. In E. L. Worthington Jr. (Ed.), *Dimensions of Forgiveness*. Radnor, PA: Templeton Foundation Press, pp.321-339.
- Worthington, E. L., Jr., & Wade, N. G. 1999 The Social Psychology of Unforgiveness and Forgiveness and Implications for Clinical Practice. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 18, 385-418.

---

(おさない あや 生活心理研究所)

(ふるかわ まさと 生活機構研究科)